

〈実践報告〉

非行少年等の心理教育的支援を目的としたエンカウンターグループ実践 —グループ・プロセスと少年の参加体験の分析を中心に—

A Practical Study of Encounter Group for the Purpose of Psychoeducational Support
for Juvenile Delinquency: Focusing on the Group and Experiencing Process

吉川 麻衣子

要約

本稿は、非行少年等の心的成長と更生のための仲間づくりを目的としたエンカウンターグループ実践をグループ・プロセスと参加体験から分析し、実践的意義を検討することを目的としている。参加に際し期待は低く不安が高かった少年は、一泊二日のグループが進行していくにつれて、個々のペースで居場所を作り、仲間との交流を始め、安全な場としての雰囲気徐徐に醸成していった。非行臨床においてエンカウンターグループが実践されることは寡少であるが、本実践を通してその有効性はある程度確認できた。今後の課題は、個々の心理的・行動的変容に焦点化した事例研究により非行性の理解に努めることと、プログラム構成の改善により、参加者にとってよりよい実践を継続していくことである。

キーワード：非行少年、非行臨床、エンカウンターグループ、PCAグループ、参加体験

I 緒言

非行少年等とは、刑法犯、特別法犯、虞犯少年を含めた非行少年に、不良行為少年を含めた捉え方である。沖縄県において、平成25年度中に検挙・補導された少年は61,073名に上り、前年度よりも19,021名(45.2%)増加している。深夜徘徊、喫煙、飲酒の順で多い不良行為少年を学職別で見ると、無職少年32.9%、中学生25.6%、高校生22.9%の順となっている。行為の内容では、飲酒、無断外泊、深夜徘徊、怠学の項目において、全国平均を大きく上回っている(沖縄県警察ホームページ, 2014)。また、窃盗犯をはじめとする刑法犯少年に占める中学生の割合は59%、高校生18%、小学生4.4%となっている。全国と比すると中学生の占める割合が約1.5倍となっており、非行の低年齢化が示されている。夜型社会が県内の子どもたちの非行の背景にあると指摘され続け、啓発活動がなされてはいるが、ここ5年間の非行少年等の推移をみると、改善の途にあるとは言い難い。

なぜ少年たちが非行に走るのか。非行性を理解する枠組みとして、「感染性非行」と「不適応性非行」の二軸で捉える見解がある。感染性非行とは、非行集団や非行文化に同化して影響を受け、非行をするようになるというもの。一方、不適応性非行は、心的なフラストレ

ションや葛藤などの補償として非行が生じるという考え方である。実際には、その両方の混合型が多数を占めることも指摘されている(水島・宮崎・屋久, 1971)。非行の原因については多くの知見が積み上げられてきた。1930年代頃から米国を中心に実証研究が始まり、個人の生理的・心理的特性であったり、生い立ちの中での親子関係であったり、家族、学校、地域社会等々における「原因」が探られてきた。しかし、時代背景や文化のよってその「原因」は変化するものであり、一般的な理論がなかなか生まれにくいとされてきた(藤岡, 2014)。

そのような子どもたちを理解し、更生のための処遇を考える際には、「ダブルロール」という問題が生じる(井上, 1980)。つまり、「少年の行動規制を課す役割」と「少年の自由意思を尊重するという役割」が求められるのである。その一見相反する役割を課せられるがゆえに、困惑させられてしまうことがある。また、非行臨床で往々にして難しいケースが多くなるのは、非行少年が行動化しやすいこと、そして、行動化を繰り返すがゆえに内省が深まらないためである。非行少年たちは、加害者であるにもかかわらず被害者意識が強いのである(村尾, 2012)。この二重の逆説の存在を踏まえううえで、非行臨床のアプローチを考える必要がある。

これまで行われてきた非行臨床の方法としては、個人心理療法、ナラティブ・セラピー、箱庭療法、マルチ・システムック・セラピーに関する報告が散見される(村尾, 2008; 生島, 1999; 吉川・富田・大宮, 2008ほか)。いずれも、既述の「ダブルロール」に対応し得よう方法論に工夫を凝らして実践されている。中でも、非行臨床にはグループ・アプローチが有効だと考えられる(藤岡, 2014)。グループ・アプローチでは、行動規範を修得させつつも、少年個人の意思を尊重する機会を提供することが可能である。報告は寡少であるが、社会内での性非行少年を対象としたプログラムによる治療教育プログラム(藤岡ら, 2010)、児童自立支援施設での男子を対象としたプログラム(藤岡, 2014)がある。後者のプログラムでは、施設入所中の中学3年生男子8名に対して、①「1年後の自分」がどんなふうになっていたいかを考えさせる、②目標達成のために変化させたい行動を特定し、変化のためのプランを立て、実行させる、③感情の認識、適切な思考、およびコミュニケーションのスキルを向上させるという3点を目標として実施された。「反社会的認知」、「感情と衝動統制のスキル」、「自分を取り巻く関係性」、「責任ある行動とは」という非行・犯罪行動変化のための心理教育的介入の中核である4つのモジュールをもとに、プログラムおよびワークが選択され、効果を上げている。しかしながら、少年院や少年鑑別所に入所経験のある少年たちの多くは、一定の期間を経過すると通常学級に再び戻る。在籍学級に戻れないケースもあるが、「少年院帰り」というレッテルが貼られ、同級生や教師たち疎まれ、更生の気持ち強くして再出発に挑もうとしても新たな居場所を得ることができず、元の不良集団にしか居場所を見つけないケースがある。少年院を退院した少年たちの再犯率は約8割と言われる。特に非行率が極めて高い沖縄県においては、少年たちの更生を支援する取り組みとして、通常学級に在籍する非行少年等への心理教育的支援が必要だと考える。

そこで本研究では、非行少年等の心的成長と更生のための仲間づくりを目的としたグループ実践を行い、本人の参加体験の分析と在籍学級の担任教諭の観察により実践的效果を検討する。この分野の端緒となる実践である。実践法は、「エンカウンターグループ」(以下EGと表記)の新しい方法である「PCAグループ」が効果的ではないかと期待できる。PCAグループ(Person Centered Approach Group)は、Rogers(1970)が提唱したEGを発展させた方法で、村山(2014)を中心に実践が重ねられている。中心哲学は、グループ・アプローチであるにもかか

ならず、「はじめに個人ありき」を第一原則にもっている。これまでのEGは、集団になじめない個人を集団に適応させようとする傾向があったが、PCAグループは、「個人を殺すことなく、今の自分を肯定しながら仲間と相互理解していく」（村山，2014）ことを目指す。これまでに、スクールカウンセラーによる学校現場での展開、大学入学初期の導入事例、看護学校学生および教員に対する実践例などがあるが、非行臨床における実践は未だない。集団に属しながらも個が尊重されるPCAグループの実践は、ダブルロールが必要となる非行臨床においても有効な手立てなのではないだろうか。その有効性について考察することも本研究の目的である。

II 方法

1. 参加者とスタッフ、および実施時期

沖縄県の公立中学校に在籍する少年12名を対象とした(12名とも男子)。対象者の選定として、まず、縁故の中学校教諭(生徒指導主事)に企画趣旨を説明し理解を得た上で、今回の研究目的に合致する生徒を挙げてもらった。さらに、比較的離れた地区の中学校3校にも対象者のピックアップを依頼した。その段階で23名の生徒が集まったが、実施場所やスタッフの数などを考慮し、本人に参加意思があるかどうかを面接によって確認し、12名を選定した。学年は1年生から3年生までの4名ずつで、非行歴は平均で約3～4年であり、喫煙・深夜徘徊・飲酒を全員が経験している。中には小学校低学年から非行歴がある生徒もいる。なお、残りの11名は本実践における対照群とした(別稿にて)。

スタッフは、オーガナイザー兼ファシリテーター(筆者)とファシリテーター3名(中学校教諭1名とグループ実践の経験がある臨床心理士2名)、スタッフの高等学校教諭1名であった。実施前に数回のミーティングを重ねてプログラム内容を検討した。

2014年8月に1泊2日の日程で、宿泊可能な公共施設にてクロズド・グループで行われた。

2. 実施プログラムの内容

プログラム内容は、木村・相原・村山(2013)と藤岡(2014)を参考に選定した。詳細は表1および表2に示す。通常、学校現場のクラス単位で実施するPCAグループは、「初期不安を軽減する」→「比較的安全なレベルの自己開示」→「グループの凝集性の促進」→「自発性の発揮とクラスの凝集性の促進」という順番でプログラムを組まれることが多い(村山，2014)。本実践ではクラス単位の実施ではないが、「更生を目指す」仲間同士が互いを支え、励まし合いながら目標を達成してほしいという意図も含めてプログラムを構成した。全6セッションあり、中の第2セッションから生徒12名を6名ずつの2グループに分けたが、グループ編成は生徒間の既存の人間関係、非行歴などを考慮し行った。

また、グループにおける約束事は、①グループで知った他の参加者の個人的なことや話の内容はグループの外では話さないこと。②ルール違反・非行行為などがあった場合には保護者に連絡をして帰宅してもらうこと。③他の人の意見に対して異論は持つのはいいが一方向的に批判をしないことの3点とした。

3. 評価

(1) 参加者アンケート

a) 期待度と不安度：実施前に本実践に対する期待度と不安度を“1. まったくない”から“7. 非常にある”の7件法で回答を求めた。自由記述欄も設けた。

b) 満足度と快適度：各セッション終了後および全プログラム終了時には、セッションおよびプログラムに対する満足度を“1. 非常に不満だった”、“2. 結構不満だった”、“3. 少し不満だった”、“4. どちらともいえない”、“5. 少し満足”、“6. 結構満足”、“7. 非常に満足”の7件法で回答を求めた。快適度については、“1. 非常にきつかった”、“2. 結構きつかった”、“3. 少しきつかった”、“4. どちらともいえない”、“5. 少し楽に過ごせた”、“6. 結構楽に過ごせた”、“7. 非常に楽に過ごせた”の7件法で回答を求めた。終了時のアンケートにも自由記述欄を設けた。

(2) 心理的変容の質的指標

実施から約1カ月後(2014年9月～10月)に参加者本人に対して個別のインタビューを行った。一人につき45分とした。また、第3者による評価として、所属する学級の担任に対して、参加者の変化に関するインタビューを行った。実施時期は本人へのインタビューと同時期とした。

(3) 心理的変容の数量的指標

本稿の分析では用いないが、心理的変容を数量的に測定するために以下の尺度を用いた。

- a) 状態自尊感情尺度 (阿部ら, 2007) : 9項目から成り、日常生活の出来事などに対応して変動する自分について感じている全体的評価について測定する。
- b) 規範意識尺度 (廣岡・横矢, 2006) : 30項目から成り、学校内規範意識、学校外規範意識、向社会的行動の3観点から構成される。
- c) 多次元共感性尺度 (鈴木・木野, 2008) : 24項目から成り、他者指向的反応、自己指向的反応、被影響性、視点取得、想像性の5つの下位概念から構成される。

III 結果

1. 実施前の期待度と不安度

EG実施前(オリエンテーション)に評定した期待度は、“1. まったくない”が6名(50%)、“2. ほとんどない”が4名(33.3%)、“6. 結構ある”が2名(16.7%)であった。不安度は、“6. 結構ある”が2名(16.7%)、“7. 非常にある”が10名(83.3%)であった。実施前の参加者の状況は、8割強が期待しておらず、全員が不安を感じていた。

2. グループ・プロセス

表2にグループのプロセスと各セッションの様子を記した。

3. 各セッションおよび全体を通しての満足度と快適度

各セッション終了時とクロージング時に評定した満足度と快適度について、参加者の評定推移と平均値及び標準偏差を表3および表4に示した。12名の対象者を便宜的にAからLと表記した。いずれも、数値が高いほど快適あるいは満足だったと評価していることを示す。

表1 プログラムのタイムスケジュール

【1日目】	
10:00～10:30	オリエンテーション、アンケート
10:45～11:30	【第1セッション】身体感覚を確かめる
11:45～13:00	昼食、休憩
13:00～15:00	【第2セッション】小グループの形成
15:30～16:30	【第3セッション】自己紹介、期待と不安共有
17:00～19:00	夕食、休憩
19:00～21:00	【第4セッション】自己表現
【2日目】	
7:00	朝食、散策
9:00～11:00	【第5セッション】夢を語るワーク
11:00～12:30	昼食、休憩
12:30～14:00	【第6セッション】こころの花束
11:30～12:00	クロージング、アンケート

表2 グループ・プロセス

	ワークの内容	参加者の様子
第1セッション 「身体感覚を確かめる」	初期不安の緩和やリラックス効果をねらったセルフマッサージやイメージを用いたリラクゼーション。第1セッションはグループではなく個人ワークである。	<ul style="list-style-type: none"> ・緊張感が高い ・互いのなわばり意識が強い ・次第に心身が解れる
第2セッション 「小グループの形成とグループアイデンティティの形成」	第2セッションから小グループに分かれ、グループワークとなる。ワーク「100マス作文」実施後、三角錐形のボール紙の3面に名前、自分の特徴、今はまっていることを記し自己紹介。自分たちのグループ名を決めてもらう。	<ul style="list-style-type: none"> ・メンバーの発表前は落ち着かない ・100マス作文では笑いが起き表情が緩む。中学生らしく騒ぐ様子あり ・自己紹介を終え、ようやく名前を知り安心している
第3セッション 「自己紹介、期待と不安の共有」	見知らぬ人たちが、特定の目的のために集まった際の初期によく使うワーク「帽子の中の期待と不安」を実施。無記名で本音を書きやすいこと、読み上げるので全員が発声できること、意見も比較的述べやすいこと、自分と似た意見が出やすく共感しやすいこと、他者からの尊重を得られやすいという特徴。	<ul style="list-style-type: none"> ・自己紹介時には声が極端に小さいか、大声を張り上げるか ・自分が書いたものを自己申告する者もいてルール理解が少々難しい ・不安は自分だけではないと安堵したと感想あり
第4セッション 「自己表現」	写真や雑誌などの非言語の材料を用いて、自分自身を表現してもらう「コラージュ」を「今の気持ち」をテーマにして実施。自分ひとりで作業し、グループ内で感想をシェアする。言語化の苦手な人にとってはイメージの世界で楽しめるという特徴。	<ul style="list-style-type: none"> ・夕食後には談笑する光景も見られるようになり、場の雰囲気はよい ・車やバイクのコラージュが多い ・黙々と取り組み、シェアもできた
第5セッション 「夢を語るワーク」	各自3分間「夢」を語ってもらい、夢を聞いたメンバーが一人ひとり順番に、夢の実現に役立つ具体的なことを伝える「夢を語る守護霊ワーク」を実施。各人にパワーを与えるとともに、勇気をもらうことになる。参加者から評価の高いPCAのワーク。	<ul style="list-style-type: none"> ・恥ずかしがって「やりたくない」という参加者2名。徐々に慣れる ・生まれて初めて夢を考え、口にしたという参加者1名 ・笑いが多く盛り上がる
第6セッション 「こころの花束」	メンバー各自の魅力的なところ、長所をカードに書いてグループで発表し、それを花束としてプレゼントするワーク。特に、他人から直接ほめてもらうこと、伝えることが特徴。	<ul style="list-style-type: none"> ・メッセージを書くことには苦勞 ・急遽、スタッフへのメッセージも自主的に書いてくれた ・メッセージを読まれて涙を流す参加者9名

快適度、満足度ともに後半のセッションにかけて評定が上がっていた。中でも、第6セッションの「こころの花束」では、快適度の平均評定値は6.25、満足度の平均評定値は6.58であった。ただし、個別の回答傾向を見ると、G少年の快適度は一貫して“4. どちらともいえない”であり、満足度についても中位の評定をしていた。グループ中の表情もあまりよくなかった。

4. 1か月後のフォローアップ面接と担任教諭からのフィードバック

1ヶ月後に対象者12名にフォローアップ面接を実施したところ、実施後に心身の状態を崩した者はいなかった。グループ後から参加者と連絡を取り合っている様子や、「あの時のこと」としてグループ時の様子を話してくれた者もあり、12名中11名からはグループ参加に対する否定的な感情はなかった。既述したG

表3 各セッション・全体に対する快適度の回答傾向および平均値 (SD)

	第1セッション	第2セッション	第3セッション	第4セッション	第5セッション	第6セッション	全体
A	1	2	2	6	5	7	6
B	3	3	5	5	5	6	5
C	2	3	3	4	6	7	6
D	5	5	5	5	5	5	6
E	3	4	4	4	4	7	7
F	5	3	3	3	3	6	6
G	4	4	4	4	4	4	4
H	6	5	6	6	6	6	6
I	4	2	2	4	3	7	7
J	3	4	4	4	5	7	7
K	3	3	3	3	3	6	6
L	3	5	5	4	6	7	7
Ave.	3.50	3.58	3.83	4.33	4.58	6.25	6.08
SD	1.38	1.08	1.27	0.98	1.16	0.96	0.90

少年には2014年12月時点で未だ会えていない。

在籍する学級の担任教諭に、グループ後の少年たちの様子を尋ねたところ、「夏休みのグループ体験を終えて2学期に登校したときに、校舎の彼らのたまり場でリラクゼーションをしていたのを見て驚いた。何をしているのかと尋ねると、夏のグループでやったのだと教えてくれた」というエピソードがあった。グループに参加した12名のうち11名は2学期の初日に休まず登校していたという。また、「わずかな変化ではあるが、学校で笑顔を見せることが多くなり、表情が優しくなった」や、「授業中の離席やさぼり、他者への暴言が減り、少しだけ優しくなったような気がする」というフィードバックがあった。一方、「家庭での様子はあまり変わらないようで、親に対する暴言や深夜徘徊は依然として続いている」や、「自己中心的な言動は変わらずある」というフィードバックもあった。

表4 各セッション・全体に対する満足度の回答傾向および平均値 (SD)

	第1セッション	第2セッション	第3セッション	第4セッション	第5セッション	第6セッション	全体
A	2	4	3	5	6	7	7
B	3	2	3	5	5	6	7
C	1	3	4	6	4	7	7
D	3	3	4	5	5	7	7
E	3	2	3	4	5	7	7
F	2	4	4	5	4	6	6
G	3	4	5	6	5	4	5
H	2	3	5	4	6	7	6
I	3	3	2	5	6	7	6
J	2	4	3	6	5	7	7
K	3	3	4	6	5	7	7
L	3	3	5	6	5	7	7
Ave.	2.50	3.17	3.75	5.25	5.08	6.58	6.58
SD	0.67	0.72	0.97	0.75	0.67	0.90	0.67

IV 考察

1. グループ・プロセスと参加者の心理的変容

EG実施前の期待と不安を示す数値は、他の研究の数値よりもはるかに期待は低く、不安が非常に高いことを示していた。大学1年生を対象とした木村・相原・村山(2013)によると、期待していない参加者は28.5%、「どちらともいえない」が50.5%、期待している参加者が21.0%であり、不安度は、不安を感じていない参加者は12.5%、「どちらともいえない」が35.0%、不安を感じている参加者が52.5%である。他のいずれの実践においても木村ら(2013)と同等の数値を示している(村山, 2014)。対象者数と対象年齢による影響もあるが、「やらされ感」を包み隠さず、「嫌なものは嫌だ」と表出できることが、今回の参加者の特徴と言えるのかもしれない。

グループ・プロセスにも本実践の特徴が表れた。ひとり一人が自分のペースでスペースを確保するために、PCAグループでは第1セッションにリラクゼーションを行う。初期不安が強い参加者の場合、「からだの感じ」に注目して、今の自分の感じ、自分の気持ちに自由にふれることで不安が軽減するためである(村山, 2014)。本実践においても、「身体感覚を確かめる」という目的で、導入は“静”のワークを選んだ。他の実践でも、初期不安が高い第1セッションの評価は分かれるところではあるが、リラクゼーションを行うことで、「緊張感が少し解れた」、「深呼吸でこんなに落ち着くとは思わなかった」などの感想が少なからず出てくる(相澤, 2014)。しかし、本実践では、そのようなポジティブな感想は得られなかった。日頃リラックスするというをほとんど意識しないエネルギーあふれる今回の参加者たちは、この第1セッションの「緩い感じ」になかなか馴染めなかったようである。規律を重んじられる少年院を退院したての中学生を対象にする際には、導入ワークから“動”のワークを組んだ方がいいのかもしれない。この点は、プログラム構成上の今後の課題としたい。

そして、第2セッションで初めてグループに分かれるところが、PCAグループの特徴の一つ

である。特に本実践のように「グループ嫌い」の参加者が多い場合にも、安心して自分のペースで後続のセッションに参加できるようにするため、集団の凝集性を高めるようなワークは組んでいない。何をさせられるのか分からない不安が多少緩和したのは、グループのメンバー発表後であったように見えた。それまでは、自分の居場所・なわばりを確保するかのごとく、他者と接触をせず、視線すらも荷物で拒んで交流しないという状態であったが、6名ずつの小グループに分かれ、互いのことが少しずつ分かってくると安心し、言葉を交わすようになっていった。その後のセッションでは、小グループの中で表現療法を用いて自己表現したり、夢を語り合ったりする中で、各々にとっての居場所がグループの中に醸成されていったように推察される。そのことは、快適度および満足度の評定数値の推移からも窺い知れる。1か月後の面接時には、実施前とは違った様子も見られた。参加者の数名は、筆者に対して先に挨拶をしてくれた。実施前は睨むように人の顔を見ていた彼らが、そのような行動で接してくれたことは、数値としては表せないグループによる心理的変容と言えるのかもしれない。ただし今後は、個々の心理的変容を事例的に検討する必要がある。個々の成長・変化を評価する際には、本人が意識できていない部分にも目を向けるべきであり、少年たちが様々な場面で見せる行動変容を複眼的に捉えなければならない。可能であれば、保護者あるいは保護司へのインタビューも実施していきたい。

2. 非行臨床におけるエンカウンターグループの可能性

本研究は、沖縄県の非行少年を対象としたEGの初めての実践例であった。そのため、スタッフにも高い緊張感があり、参加した少年たちにもEGがどのようなものかが分からないため、集団生活から逸脱するようなことは一度も起こらなかった。また、非行臨床で度々取り上げられる「ダブルロール」に関して述べると、本実践で用いたPCAグループの哲学と技法は、「少年の行動規制を課す役割」と「少年の自由意思を尊重するという役割」の両方を含有するものと推察される。グループに所属していながらも、個々のペースでその場で過ごすことが認められ、集団の凝集性よりも「はじめに個人ありき」で個々の居り方に注目する点は、非行臨床においても有効な手法と言えよう。今回は、2015年3月に同メンバーでEGを実施することになっている。次回の実施に向けて、担任教諭らによる行動観察を続け、家庭環境等の変化を把握し、非行の深度等を考慮してグループ運営をしていかなければならないと考える。

特に留意しなければならないことは、少年たちの非行性の理解である。本実践の少年たちは、自我の不安定さが要因となっている「不適応性非行」の非行性が強いように感じられた。なぜなら、セッション外の時間に少年たちと話をする中で、大人に対する理由なき反抗心を抱いているというエピソードが多く聴かれ、「前エディプスの反抗」(福島, 1980)が生じているのではないかと感じられたからである。「前エディプスの反抗」とは、母子関係という二者関係の中に、父親というロゴス機能が侵入することがないままに生じているものであり、「反抗の理由が定かでなく、どういこうことをしてもらいたくて暴れているのかわからず、親や教師たちは、話が通じなくて困るような場合が多い」(村尾, 2012)とされる。そのために、少年たちと周囲の人間との間に軋轢が生じてしまうのである。そういった非行性の理解を深めるために、個別で関わる時間を今回以上に設ける必要がある。

また、本実践は、他のEG実践とは異なり、少年たちの更生の一助となることを目的の一つとして掲げている。「一泊二日のグループを体験して楽しかった」ということだけにとどまらず、これからの人生の歩みの中で「一人ひとりを大切にすること」、「安全に自分を表現する」

ということを少年たちに体得してもらえるような実践にしていきたい。少年たちが非行に走らざるを得なかった背景は個々で異なり、非行の深度や様相は決して楽観視できるものではないが、彼らの更生する力を育む機会として、「少年たちにとって信頼できる場」として、この実践を続けていきたい。

【付 記】

スタッフの労を取っていただいた各先生方をはじめ、本実践にご尽力いただいた全ての皆様
に感謝申し上げます。特に、何をさせられるのかも分からない場に勇気を出して参加し、共に
場を創ってくれた少年たちには、心から敬意を表したいと思います。有難うございました。

文 献

- 相澤亮雄 (2014) 学部生・院生・教員の連携による大学学部教育への導入の事例 村山正治編
PCA グループ入門：新しいエンカウンターグループ法 pp.101-127. 創元社
- 藤岡淳子 (2010) 性的問題行動のある子どもへの援助, 大阪府すこやか家族再生応援事業報告書
- 藤岡淳子 (2014) 非行・犯罪心理臨床におけるグループの活用：治療教育の実践 誠信書房
- 福島 章 (1980) 反抗の心理 大原健士郎・岡堂哲雄編 講座異常心理学3 思春期・青年期
の異常心理 pp.116-127. 新曜社
- 生島 浩 (1999) 悩みを抱えられない少年たち 日本評論社
- 木村太一・相原誠・村山正治 (2013) 大学一年生を対象とした PCA グループ実施の試み：入
学初期の不安緩和と仲間関係の育成を目的として, 福岡国際大学紀要, 29, 55-60.
- 村尾泰弘 (2008) 非行臨床への箱庭の適応 箱庭療法学研究 20 (2), 45-58.
- 村尾泰弘 (2012) 非行臨床の理論と実践：被害者意識のパラドックス 金子書房.
- 村山正治 (2014) PCA グループ入門：新しいエンカウンターグループ法 創元社.
- 水島恵一・宮崎清・屋比孝夫 (1971) 非行診断スケール (DSP) の作成と検討 科学警察研究
所報告防災編 12 (1), 70-76.
- 沖縄県警察ホームページ <http://www.police.pref.okinawa.jp/>
- 吉川和男・富田拓郎・大宮宗一郎 (2008) 少年犯罪・非行の精神療法 マルチシステムック・
セラピー (MST) によるアプローチ 精神療法 34 (3), 306-313.